

白山の自然誌 24

白山の30年



2004年3月

石川県白山自然保護センター

はじめに

石川県白山自然保護センターが白山の麓に根を下ろして、30年が経過しました。この間、多くの方々の協力を得ながら、白山の自然環境の保全と利用を図るために各種の事業を進めてきました。開設当初は、自然環境について何もかもが分からず、一步一步積み上げながら白山の自然を解き明かしてきました。

これまで白山の自然誌シリーズでは、化石や白山火山などの地学分野、ブナ林、高山植物などの植物生態、イヌワシやニホンザル、ニホンカモシカなどの白山を代表する野生動物の生態、白山高山帯、蛇谷や市ノ瀬など白山国立公園の地域を限定した見所紹介、白山の蝶、両生類、爬虫類など分類群毎の紹介、出作り、焼畑、白山の禅定道など人との関わりについて明らかになってきたことについて紹介してきました。

今回の自然誌「白山の30年」では、これまで白山の自然と人々の暮らしの中から分かってきたこと、変わってきたことを広く紹介したいと思います。

表紙：白山山頂から見たご来光
裏表紙：ハクサンコザクラ

目 次

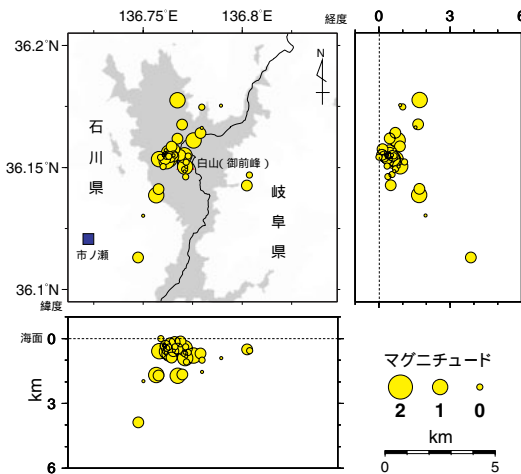
生きている白山	2
古い火山と新しい火山	3
積雪深の記録	4
室堂平の植生の回復	5
希少植物を絶滅から守る	6
高山の鳥イワヒバリ	7
ニホンカモシカ	8
ニホンザル	9
ツキノワグマ	10
ブナ林の鳥類	11
県鳥イヌワシ	12
まだ多く解っていない自然があります	13
発見された化石たち	14
白山林道緑化	15
ブナ林の復元	16
白山ゴミ持ち帰り運動	17
白山麓の人口移動	18
高齢化と変わる産業構造	19
白山国立公園の利用者と中宮展示館来館者数	20
おわりに	21

生きている白山

白山の最後の噴火は今から約340年前の1659年です。この歳月は30～40万年の白山火山の歴史からいえば、ほんのわずかの時間です。

現在、白山では噴煙などの目に見える火山活動はありません。しかし、山頂の地下およそ3～5kmのところ、人には感じられない微小な地震が発生していることがわかっています。また、マグマ活動と関係すると考えられている低周波地震が、1999年に白山で初めて観測されました。これらのことは、白山火山が現在でも生きていることを示すものと考えられます。

これまで山頂部付近の火山噴出物の調査から噴出年代の推定や、活動規模、活動状況などが調べられてきました。その結果、ここ約3,000年の間に平均するとおよそ430年に一度の割合で火山活動があったこととなります。しかし、火山灰などは雨水や風などによって流されることなどもあり、確認された以外にも火山活動があった可能性もあります。古文書によると、100年間ほど断続的な活動を続けた記録もあり、一旦白山が火山活動を再開すると、長期間続くことも予想されます。これからも白山の火山活動を注意深く見守っていく必要があります。



2001年8月～9月。影の部分は標高2,000m以上の地域を示す。右図は南北断面、下図は東西断面で、数値は海面からの深さを示す。マグニチュードは地震の大きさを示す。(高橋ほか、2002から)



早春の白山

後方の左の山が乗鞍岳。白山と共に活火山に分類されています。

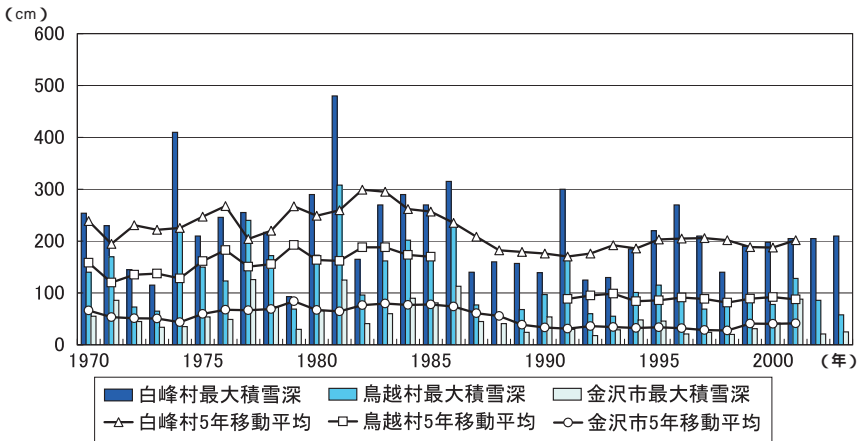
積雪深の記録

「豪雪地帯」として知られた白山麓ですが、最近では「雪が降らなくなった」と言われるようになりました。では本当に雪は降らなくなったのでしょうか。

図は、白山麓の白峰村、鳥越村と金沢市での1970年以降各年の最大積雪深を表したものです。一番雪が多いのは白峰村、次いで鳥越村、金沢市の順で、平均すると白峰村が219cm、鳥越村が127cm、金沢市は52cmでした。白峰村をみると、最も雪の多かった年は1981年の480cmでした。この年は「56豪雪」と呼ばれ、たくさんの雪が降った年です。最も少なかった年は、1979年の93cmであり、1981年の5分の1以下です。このように年毎の積雪には変動がありますが、全体的な傾向として雪は少なくなっています。

積雪深の変動を見てみると、1980年代後半から値が減少傾向にあります。1986年以降2003年までの最大積雪深の平均は白峰村194cm、鳥越村97cm、金沢市40cmで、1970 - 85年の平均と比べ、それぞれ52cm、62cm、26cmといずれも減少していました。

積雪の減少傾向は、「地球温暖化」の影響によるものかもしれません。白山の自然環境に大きな影響を与えることが予測される積雪量の減少に関しては、今後も継続して調べていく必要があります。



最大積雪深の記録

各年の最大積雪深は、寒候期（前年11月 - 当年4月）の最大積雪深（1988年の鳥越村は欠測。日本気象協会・白峰村役場資料より作成）。

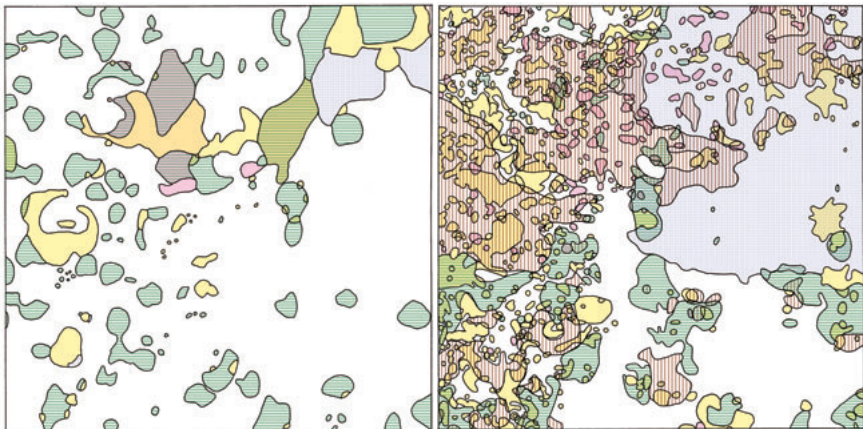
室堂平の植生の回復

高山は低温と強風、強い紫外線のため、植物が生育するにはとても厳しい環境です。さらに冬季の白山山頂付近は、気温が氷点下20 以下になり、寒風と日本海からもたらされる多量の水蒸気により、場所によっては10mを超える積雪となります。

植物が生育、生長するには、十分な温度と日光、土壌中の水分、栄養素が必要です。高山の夏は雪が消えるわずかな期間だけです。その間に高山植物は、芽を出し、花をつけ、実を結ばなくてはなりません。

登山靴で踏みつけられたり、工事によって高山植物が生えなくなったところがどのように回復していくかを、1973年から30年間にわたり追跡調査してきました。調査区画を設け、毎年、植物の種類とその植物が覆っている面積を調べていきます。1973年には区画面積の37.0%しか植物が生えず、あとの部分は地面がむき出しのままでした。2002年には78.9%が植物で覆われていますが、30年を経た現在でも区画全体が完全に覆われるような状況にはなっていません。

高山では植生が一度破壊されると、その回復速度は遅く、元に戻るには非常に長い年月がかかることが分かります。



1973年

2002年

- | | | | |
|------------|------------|-----------------|------------------------|
| □ 裸地 | ■ ヒロハノメススキ | ■ クロクリとその他の植生 | ■ ヒロハノメススキとその他の植生 |
| ■ ガンコウラン | ■ クロクリ | ■ クロクリとヒロハノメススキ | ■ クロクリとヒロハノメススキとその他の植生 |
| ■ ショウジョウスゲ | ■ その他の植生 | | |

高山帯植生の回復状況 (菅沼・辰巳(1996)及び辰巳・菅沼(未発表)より作成)

希少植物を絶滅から守る

白山には山麓まで含めると約750種の植物が生育しています。そのうち約200種が、絶滅のおそれのある野生生物として「いしかわレッドデータブック2000」に掲載され、さらに約70種が特に絶滅の危険性が高いために、絶滅危惧 類及び 類にランク付けされています。

高山植物の地域的な違いをDNAレベルまで調査するとハクサンコザクラなど一部の高山植物に、白山に特有のDNAを持っていることが明らかになりました。これは、高山植物のように他の生育地と切り離されて生育するうちに、遺伝子の交流が無くなり、長い年月のうちにその地域に特有なものになったと考えられています。白山に生育する高山植物の保護がさらに重要になってきました。

これまで白山では、生育地を保護するため一帯を国立公園として指定し、開発行為等を制限するとともに、登山者の踏み荒らしによる植生破壊を防ぐため、荒れた登山道を整備してきました。また、土壌の流出防止や植生を復元するための工事の際には、白山以外からの遺伝子の混入を防ぐため、工事現場周辺にある植物から種子を採取し、播種や移植するなどの工法を実施し、種の保護を図ってきました。

最近では、現地以外での保全も重要視されるようになり、高山植物の種子保存や無菌播種、組織培養といったバイオテクノロジーを用いた保存技術の研究も行っています。



いしかわレッドデータブック2000



無菌播種によるハクサンコザクラの培養
(写真提供 石川県農業短期大学)

高山の鳥イワヒバリ

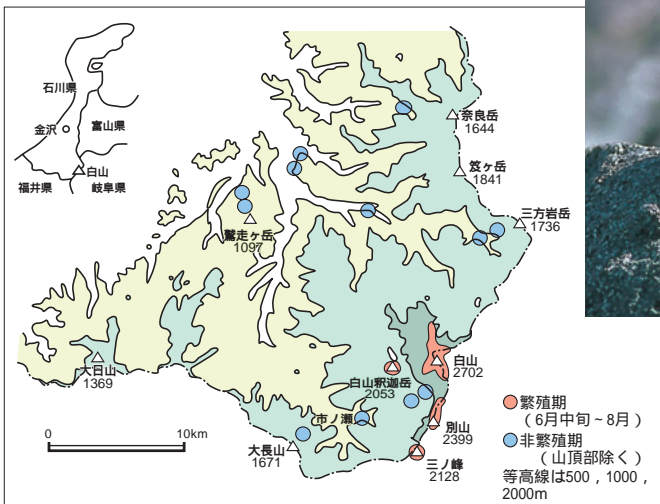
日本の高山帯の鳥類としてはライチョウとイワヒバリがあげられます。ライチョウは、かつて白山に生息していましたが、昭和の初期ころに絶滅したと考えられています。白山ではイワヒバリが高山の鳥です。

白山でイワヒバリの数や分布について最初に報告した熊野・木村(1970)は、「恐らく20を超えない小群のみが、御前峰の岩礫地帯に生息し」と記しています。白山自然保護センターの調査では1981年の繁殖期に白山山頂部を中心に、北は清浄ヶ原から南は別山までに生息していることを明らかにしました。次いで1983年と1984年の調査で、少なくとも33羽の生息を確認し、6か所の巣の場所が分かりました。

また1993年～1996年にはイワヒバリを捕獲し、色の付いた足輪をつけ、個体識別法による行動追跡調査を行いました。

白山山頂の御前峰、大汝峰、剣ヶ峰で囲まれた範囲に7群40羽が生息し、山頂部以外にも四塚山から別山までの範囲に分布しており、白山全体で少なくとも16群71羽が繁殖期に生息していることを確認しました。

さらに、秋から冬の間の非繁殖期の分布状況が次第に明らかとなり、ブナ帯の急傾斜地や標高280mの低地にもいることが分かっています。



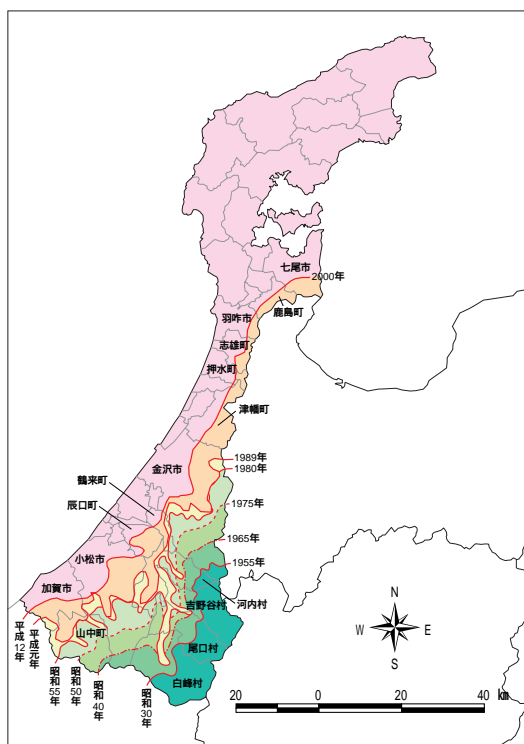
イワヒバリの石川県内での分布

ニホンカモシカ

ニホンカモシカのことを白山麓では「カベジシ」、「アオジシ」、「ニクジシ」などと呼んでいました。「カベジシ」は岩壁に住むことから、また「アオジシ」は灰色がかった毛色から、「ニクジシ」は食肉用に捕獲していたことに由来しています。

そのため数が減少し、1934年に国指定天然記念物、さらに、1955年には特別天然記念物になりました。白山でも山中奥深い場所でわずかに足跡を見かける程の希少な動物でした。1966 - 1967年に白山蛇谷で初めて実施された生息数調査では、糞をもちいた調査が実施されました。1970年代からは中宮温泉や蛇谷周辺で見られるようになり、カモシカの社会構造についての研究が行われました。1980年には定点観察による生息数調査が尾口村目附谷で実施され、1km²あたり6.5～7.4頭のカモシカが確認されました。

1982年に白山を中心に石川、福井、岐阜、富山の約540km²の地域を文化庁は白山カモシカ保護地域に設定しました。それ以降も分布が広がりに90年代には金沢市、小松市の山間部でも見られ、2000年代にはいと加賀から河北郡、羽咋郡の丘陵部にも見られるようになっていきます。



ニホンカモシカ

ニホンザル

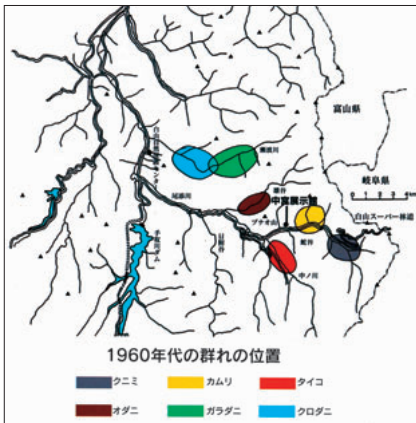
ニホンザルの県内の生息数は1960年にはわずかに6群300頭でした。その分布は、現在白山スーパー林道が通過している手取川支流の尾添川周辺だけに限られていました。この地域に残ったのは、地形が急峻で、雪崩が多く、狩猟期間はとても危険な場所だったためと言われています。

1968年にジライ谷でカムリ群と呼ばれる群の餌付けに成功し、その後、「ジライ谷野猿公苑」として石川県と吉野谷村が共同で運営し、野生のニホンザルの見られる自然教育施設として1994年まで餌付けが続けられました。

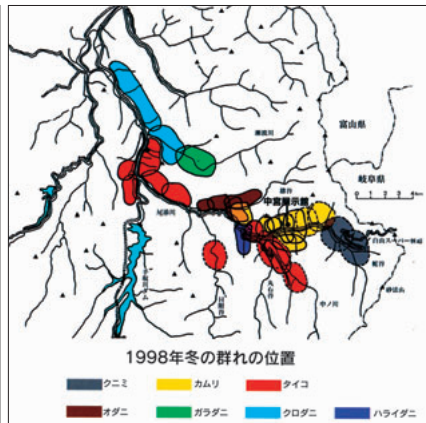
一方、1969年以来の白山自然保護調査研究会の伊沢紘生さんや滝澤均さんらにより、カムリ群に関する家系や、冬越しと栄養状態の関係、群れの分布の変化、個体数の増加の過程が明らかになっています。

群れの季節移動や、動向については白山自然保護センターが調査を実施してきました。このような長期の変化がわかっているのは全国でも数か所しかありません。現在では25群約1,000頭となっています。

一方、1983年からは、集落周辺の農作物被害が発生するようになり、有害鳥獣捕獲が実施されるようになりました。これらの成果を元に2002年に石川県特定鳥獣保護管理計画が策定され、ニホンザルの保護管理事業が実施されています。



ニホンザル分布図 1960年



ニホンザル分布図 1998年

ツキノワグマ

ツキノワグマは、狩猟や駆除され続けてきた動物です。白山麓では、春の残雪期にクマ猟が実施されてきました。1960年代には白峰、尾口、吉野谷の3村で毎年平均65頭が捕獲されてきました。1980年代までは、白山麓の土産物店の店頭に「白山熊」の熊肉缶詰が並んでいました。

しかし、クマの生態はわからないことばかりでした。1980年から5年間クマに発信器を付けての行動追跡が白山でなされ、餌のあるところには滞在し、餌がなくなると移動を繰り返すこと、1年間に約25km²の行動域を動き回ることなどがわかりました。しかし当時の発信器は電池の寿命が6か月しか持たないため、追跡しているクマを冬眠中にさがし出し、発信器の付いた首輪を付け替えることもありました。

1995年から3年間、県内27か所で個体数推定調査が実施され、県内の成獣は約560頭と推定されました。2002年には、これらの調査結果を元に、石川県特定鳥獣保護管理計画がたてられ、国設白山鳥獣保護区と大日山鳥獣保護区などをクマの保護地域と指定し、それ以外の地域では個体数調整（捕獲）を実施することになりました。また、捕獲数は県内の推定生息数の10%以内に抑えられることになりました。

最近では里山地域の森林を伐採しなくなったために、クマの生息に適した林齢の高い森が育ち、集落周辺まで生息地を広げています。



冬眠中に首輪を付け替えたクマ

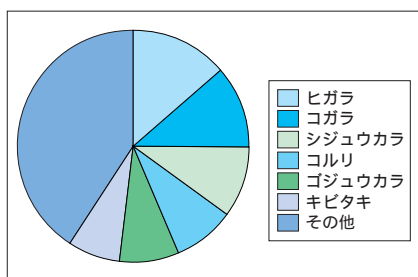
ブナ林の鳥類

ブナ林内の鳥類群集の構成を調べるため、白山山系の主なブナ林で調査を実施してきました。

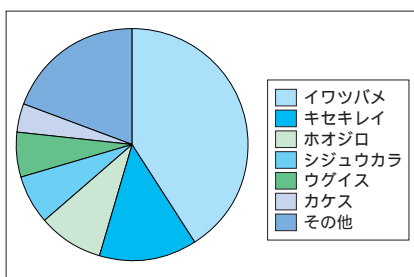
繁殖期のブナ林での優占種は金沢市犀川上流の高三郎山ではコルリ、シジュウカラ、ヒガラ、奈良岳のブナ林ではシジュウカラ、ヒガラ、コルリであり、別山チブリ尾根のブナ林ではヒガラ、コガラ、シジュウカラが優占種であることなど、繁殖期のブナ林の鳥類群集の構成が明らかになりました。

また、白山スーパー林道の建設の影響を知るため、建設直後から沿線の鳥類群集の変化を追ってきました。同じブナ帯にありながら、森林の伐採により白山スーパー林道沿線の鳥類群集が大きく変わったと思われます。林道開設直後にはキセキレイ、ホオジロ、ウグイスが優占していて、前記のブナ林の鳥類群集とは大きく異なり、環境変化の影響があることが明らかでした。その約10年後の調査では大きな変化はみられずキセキレイ、ホオジロ、シジュウカラが優占していました。

さらに約10年たった1998年にはイワツバメ、キセキレイ、ホオジロが優占していました。イワツバメの急増が顕著で、これは本来、自然の岩壁に営巣していたこの鳥が、林道建設で造られたトンネルやロックシェイドの天井部などを新たな営巣場所として利用を始めたことが原因です。



チブリ尾根ブナ林の鳥類



白山スーパー林道の鳥類

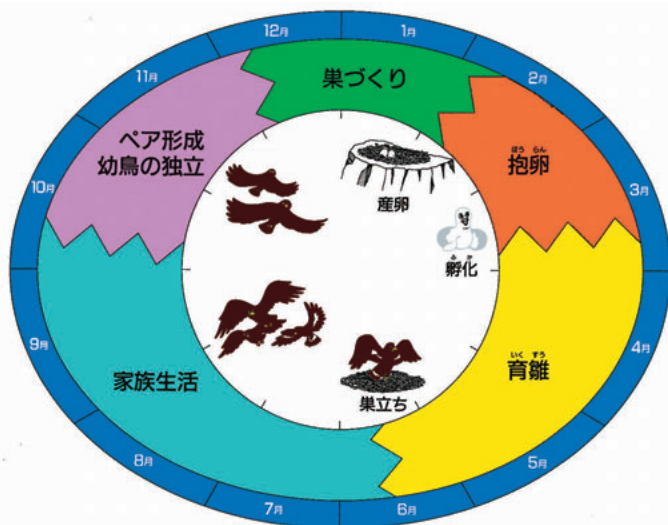
県鳥イヌワシ

イヌワシが県鳥に制定されたのは1965年のことです。しかし当時、石川県内での生息状況は分かっていませんでした。巣が見つかり、繁殖が初めて明らかになったのは1974年です。このとき白山北部の高三郎山周辺で1羽の雛の巣立ちが確認されました。

本格的な調査が始まったのは1977年からです。白山自然保護センターが中心となり、金沢大学理学部の協力を得て、県内の分布状況や個体数、繁殖状況などが明らかとなっていました。イヌワシは白山を中心に北は医王山付近まで、西は大日山西方までの範囲に広く分布しており、生息数は40～50羽と推定されました。白山地域では主要な尾根を境界として、大きな谷ごとにつがいの2羽で生活していること、行動圏の面積は20～60km²で、餌としてはノウサギ、ヤマドリ、ヘビ類などが多いことが明らかとなりました。

1998年～2000年に行われた調査では、県内全域でのイヌワシは30～40羽と推定されました。イヌワシの生息数は全国でも400～500羽といわれています。その約1割近くが石川県の白山に生息しています。

まさに、石川県はイヌワシを県鳥とするにふさわしい県であるといえます。



イヌワシの1年間の生活

まだ多く解っていない自然があります

この30年間に白山における動物の確認数は哺乳類44種、鳥類126種、爬虫類12種、両生類16種、魚類9種、昆虫類は2000種以上になります。そのなかで新たに確認された種は、哺乳類12種、両生類2種などです。中でも昆虫類は新たな発見が続き、毎年10数種ずつ新たに確認されています。

新たな確認のあったものの特徴は、哺乳類を例にすると夜行性であったり、高山帯や地中や水中、空中など特殊な生息地に生息するものでした。今後、新たに発見される可能性のある哺乳類はいるのでしょうか。隣の岐阜県に確認され、県内では未確認の種にチチブコウモリがいます。さていつ発見されるのか楽しみです。

30年間に新たに確認された哺乳類

	種名	確認年	初確認場所
1	ヤマネ	1971	白峰村別当出合
2	ミズラモグラ	1975	白山御前峰
3	シナノホオヒゲコウモリ	1979	白峰村六万山
4	テングコウモリ	1979	吉野谷村中宮
5	ウサギコウモリ	1979	尾口村尾添
6	カグヤコウモリ	1979	白峰村市ノ瀬
7	モモジロコウモリ	1980	尾口村尾添
8	ヒメホオヒゲコウモリ	1980	吉野谷村中宮
9	コキクガシラコウモリ	1980	吉野谷村中宮
10	アズミトガリネズミ	1990	白峰村釈迦新道
11	ノレンコウモリ	2002	尾口村尾添
12	モリアブラコウモリ	2002	吉野谷村中宮

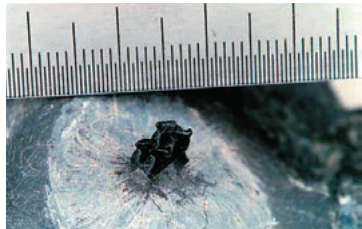
発見された化石たち

金沢から国道157号線を南下し、白峰村桑島の桑島隧道をぬけると手取川ダム湖の対岸に、通称桑島化石壁とよばれる崖があります。1億数千万年前の手取層群の地層で、以前からナギやマキ、イチョウなどの植物化石を数多く産出することで知られていました。特に産出例の少ない立木の珪化木化石が認められたことから、1957年に“手取川流域の珪化木産地”として、国の天然記念物に指定されました。1986年には桑島化石壁から恐竜の歯と足跡の化石が発見され、全国的に脚光を浴びるようになりました。その後、福井や富山、岐阜県に分布する手取層群からも恐竜化石が発見されました。

桑島化石壁近くでトンネル工事が実施され、1997～1999年度にその掘削残土に関する調査が白峰村教育委員会によって集中的に行われました。その結果、恐竜化石以外にも哺乳類型爬虫類のトリティロドン類や小型哺乳類、トカゲ類、翼竜など、新たな化石の発見が多数ありました。これらの化石は古生物の進化を考える上でもきわめて重要な資料を提供しています。調査は現在も行われており、今後とも新しい発見が期待されます。



肉食恐竜の歯、長さ約4cm(写真提供 山口一男氏)



哺乳類型は虫類トリティロドンの下顎類歯
(写真提供 白峰村教育委員会)



原始的哺乳類三錐歯類の下顎と臼歯
長さ17mm(写真提供 白峰村教育委員会)

白山林道緑化

白山スーパー林道は石川県尾口村と岐阜県白川村を結ぶ全長33.3kmの多目的林道です。1967年に着工し、1977年に開通しました。かつて秘境と呼ばれた蛇谷溪谷は豪雪地帯で雪崩も多く、急峻なうえ、岩壁の多い地形は人を寄せ付けないところでした。そのため、建設工事に際しては出来るだけ山腹を痛めないようにトンネルを多くすることで、自然破壊を少なくするようにつとめました。しかし、建設直後は、林道際の山腹斜面はむき出しになった岩壁が目立ち、早期に緑化する努力が重ねられました。

しかし、むき出しの岩の表面に直接木を植えたり、種子を撒いても植物は根付くことが出来ません。そのため、土と肥料と種と接着剤を混ぜたものを岩に吹き付けたり、斜面を階段状にして、そこに土をいれ種子を撒くといった工法が取られました。斜面の土を安定させることさえ出来れば、放っておいても周りから様々な植物の種子が入り込んできて、自然な植生が回復できるのです。



1977年の第2ヘアピン付近
(道路下の斜面に階段を切って、土が移動しないよう工事をしています。入り込んできた種子は発芽し、いつかは樹木も生えるようになります。)



2003年の第2ヘアピン付近
(緑がよみがえり、ハンノキ類やミズナラなどの樹木が生えています。)

ブナ林の復元

ブナ林は豊かな白山の自然のシンボルです。白山のブナ林は、何百年という歴史を経てやっとできあがったのです。

クマやサルなど生き物たちのすみか、四季を彩る美しい森、人々の暮らしを守る緑のダムを合言葉に復元が試みられています。

ブナ林の復元事業は、ブナの苗を作るところから開始されました。秋にブナの種子を拾い、林の中で自然に芽生えた苗を集めて、苗木を育てました。その苗木を使って、白山麓の出作り跡地や白山自然保護センターの施設周辺4か所にブナを植えました。

1991年からはブナ植林地の下草刈りを始めました。大木になるブナも植えてから10年間ほどは成長が遅く、成長のよい他の植物に覆われ、大きくなれず負けてしまうのです。1996年からは「石川の森づくり推進協会」などのボランティアの協力を得て植栽と下草刈りやつる切りなど保育を続けています。

今では15年前に植えたブナは高さ2mを越すものもありますが、まだ1mに満たないものもあり、今後10年以上は下草刈りやつる切りを続けていかなければならないでしょう。



ブナ植栽地の下草刈り作業

白山ゴミ持ち帰り運動

今では、白山はゴミのない美しい山として知られています。しかし、1965年頃の白山はゴミがあふれ、お花畑までゴミの散乱する山でした。山小屋では、生ゴミや紙くずは焼却し、その燃えかすは穴に埋めていました。しかし、量が多く、埋める場所もないほどの状態になっていました。

このようなゴミ問題に対し、1973年から対策が始まりました。ゴミはゴミ箱がなければ捨てられません。また、自宅から持ってきたゴミは自宅まで持って帰ればよいわけです。そこでまず、1973年からゴミの持ち帰り袋が配布され、続いて1976年にゴミ箱の撤去が始まりました。最初のうちは登山者からの反対などもありました。登山道、山小屋などのゴミ箱は、1977年にはすべてが取り払われました。こうしてゴミ持ち帰り運動が本格化しました。室堂と南竜山荘のゴミの量は1976年の37トンから1986年には12.7トンに減少しました。その後も着実に減少しています。

ゴミ持ち帰り運動とあわせて、1974年からはゴミ拾いも進められました。徹底した普及活動により、白山ではゴミの持ち帰りが常識となり、登山者のマナーとして完全に定着しています。

はじめて白山を訪れる登山者からは、高山植物の美しさとともに、ゴミのない美しい山として賛辞が寄せられています。



ゴミ持ち帰り運動

白山麓の人口移動

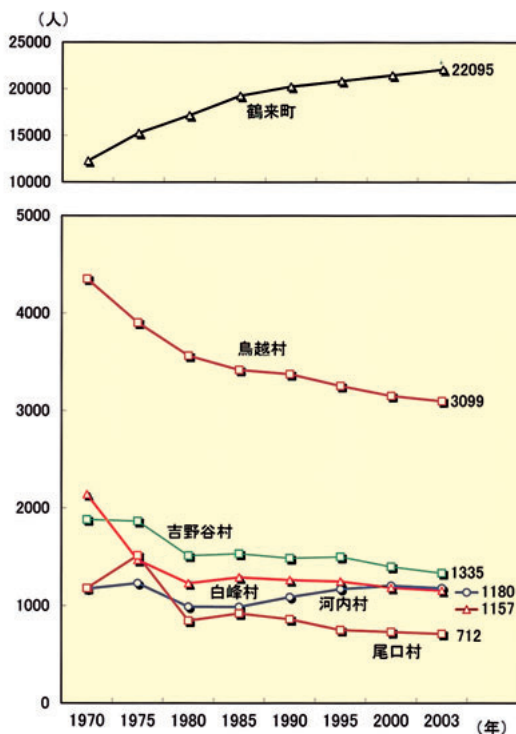
1950年代後半の高度経済成長期以降、日本の産業構造は大きく変化し、農村部から都市部への急激な人口移動が起りました。白山麓の1町5村においても、人口や人口構成が変化していきました。

図は白山麓1町5村における1970年以降の人口の変化を表しています。鶴来町を除く他の5村の人口は、減少・横ばい傾向にあります。5村では仕事や都市的な生活を求めて、若年層を中心に転出が続きました。その逆に、鶴来町では人口が増加していきます。

鶴来町は金沢市のベッドタウンとして宅地開発がすすみ、人口が流入しました。また、1980年に竣工した手取川ダム建設などの開発事業に伴い、水没することとなった白峰村桑島や尾口村深瀬の住民が鶴来町に集団移転したことに代表されるように白山麓の村々からの転入も人口増につながっています。

白山麓5村では人口が減少し、過疎化に直面することとなりました。このため、白山スーパー林道の建設や、5村すべてにスキー場が建設されるなど観光開発が行われました。

近年は、自動車の普及とともに道路網の整備が進み、白山麓の村々からも金沢市や松任市へも通勤が可能となりました。白山麓の村々でも宅地開発が行われ、河内村では、人口が増加する傾向にあります。

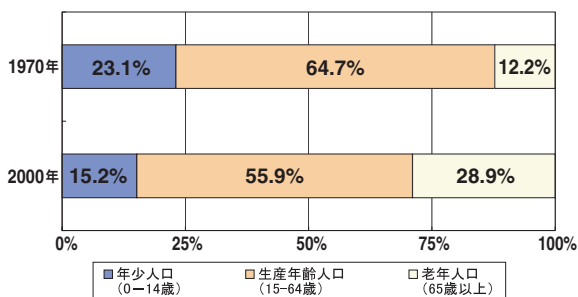


白山麓1町5村の人口の推移

1970～2000年は「国勢調査」による10月1日現在の人口、2003年は「石川県の人口と世帯」による10月1日現在の推計人口。

高齢化と変わる産業構造

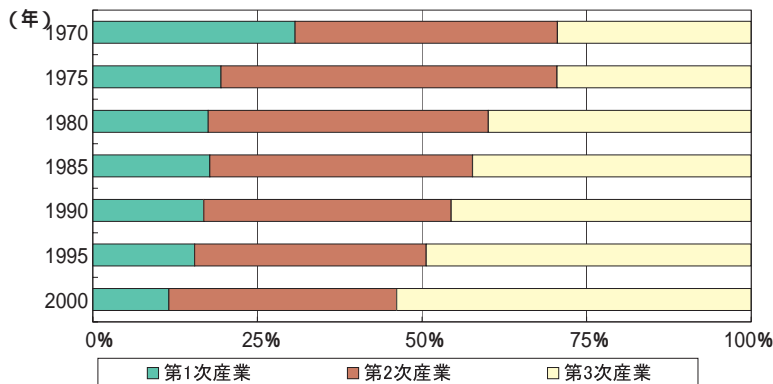
白山麓5村の年齢別人口構成の推移は、65歳以上の老年人口は1970年に12.2%でしたが、2000年に28.9%と2倍強に増加し、いわゆる高齢化が進みました（右図）。今後も高齢化の進行が予想され、高齢者への福祉対策がさらに重要になってくると思われます。



白山麓5村の年齢別人口構成の推移
(国勢調査により作成)

かつての白山麓の村々では、農林業が産業の中心であり、山間地では焼畑が行われ、養蚕や製炭業が大切な現金収入源でした。しかし、1950年代後半に押し寄せた燃料革命により、燃料は木炭や薪から電気・ガス・石油に切り替わり、白山麓の製炭業も大きな打撃を受けました。

白山麓5村の農林業は衰退し、農林業従事者の割合は1950年に約70%でしたが、1970年に30%、2000年には12%と激減しました。1970年代は公共事業が盛んでダムや道路建設、治山、砂防などの第2次産業が中心でした。最近では、観光業などの第3次産業が50%以上を占め、産業の中心が移り代わっています。

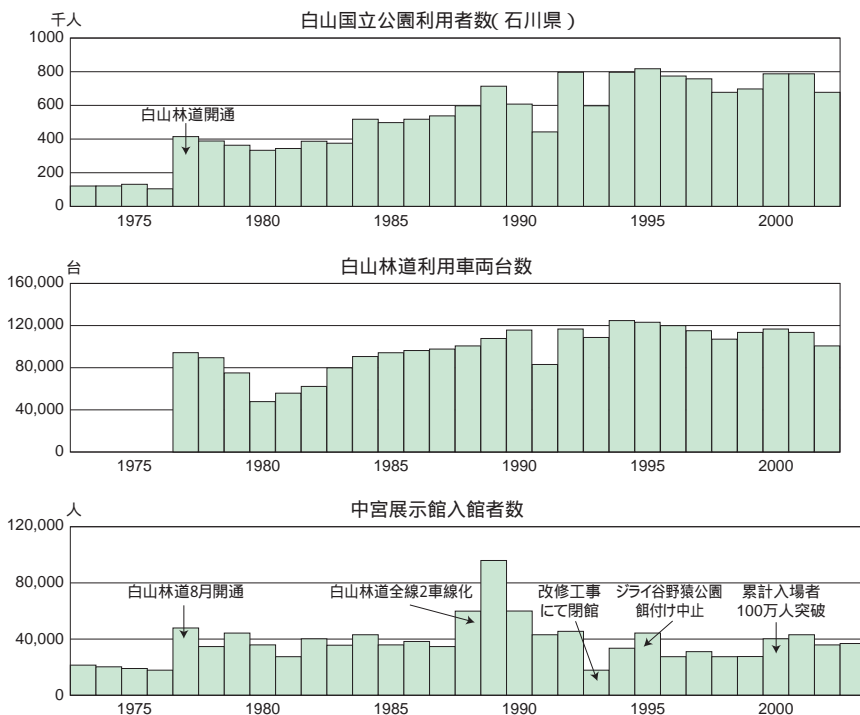


白山麓5村の産業別人口構成の推移 (国勢調査により作成)

白山国立公園の利用者と中宮展示館来館者数

1973年頃の白山国立公園の石川県側利用者数は少なく、20万人にも達しませんが、白山林道の開通により40万人を越えるようになりました。1992年には初めて80万人に達し、その後70万から80万人のあいだで変動しています。

中宮展示館は開館当初は、年間入館者数は2万人にも達しない状態でしたが、白山林道の開通した1977年には5万人に達しました。さらに白山林道の全面2車線化が完成した翌年の平成元年には年間入館者数は10万人を突破しました。その後雪崩災害により展示館が破壊されたため、1993年には改修工事の実施で臨時閉館を余儀なくされました。開館27年目の2000年には累計入場者は100万人を突破しました。



おわりに

白山の雄大な姿を遠くから望むと、いつまでも白山は変わらずにあるように思えます。しかし、白山自然保護センターが出来て30年。僅かな歳月のなかにも、自然や人の生活の不思議の解明、発見、移り変わりがあったことを少しでも分かって頂ければと思います。

「白山の自然誌」ではこれまでに、プロジェクト調査や長年の研究で明らかになったことを中心にまとめたテーマに沿って編集してきました。今回は、白山と共に歩んできた自然と文化について30年を振り返ってみました。

白山の自然誌シリーズ

- | | |
|---------------|--------------|
| 1 手取統の化石 | 13 クマタカとイヌワシ |
| 2 ブナ林の自然 | 14 蛇谷の地形と地質 |
| 3 蛇谷の自然 | 15 白山の焼畑 |
| 4 イヌワシの生態 | 16 白山のキノコ |
| 5 白山のツキノワグマ | 17 イワヒバリの生態 |
| 6 白山の高山帯 | 18 手取川の地形 |
| 7 白山の出作り | 19 白山の蝶 |
| 8 ニホンザルの四季 | 20 白山の両生類 |
| 9 イワナと水生昆虫 | 21 白山の禅定道 |
| 10 ニホンカモシカの1年 | 22 市ノ瀬の自然 |
| 11 白山の高山植物 | 23 白山の爬虫類 |
| 12 白山火山 | |

白山の自然誌 24

白山の30年

発行日 平成16年3月20日
編集・発行 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村字木滑又4
Tel. 0761-95-5321 FAX. 0761-95-5323
E-mail hakusan@pref.ishikawa.jp
印刷 株式会社 中川印刷

